

日本教育学会 若手育成委員会報告

—2024年8月から2025年8月までの記録—

1. はじめに

2024年の大会以降は、柏木智子委員と藤田駿介委員が任期満了となり、交代して西野倫世委員と大矢龍弥委員を新規に迎えての新体制となった。

今期は、2024年11月に東京に对面で集まり、昨年度の反省および今期の計画を立案することから活動を開始した。昨年の大会が台風で完全オンライン実施になったため、昨年からの重任の委員も実際に顔を合わせるの初めてであった。各委員が自己紹介を兼ねて自分たちの来歴を共有し、キャリアの多様さを学びつつ濃密な時間を過ごした。対面で会うことの貴重さが実感された。

今期の活動計画については、前期からの方針を継続しつつ、さらに昨年の企画で参加者から寄せられた反響に即して立案することにした。すなわち、1) 2023年度までに若手育成委員会がおこなった調査結果に基づくこと、2) 「若手育成」の意味は、年齢が若いということではなく、キャリアの初期段階にあるという意味であること、3) 多様性を特に意識して活動をおこなうこと、4) 年2回のイベントを実施すること、5) 昨年度の参加者からの反響に答える企画を立案することである。具体的には、「大学就職以外のキャリアパスについて取り上げてほしい」「論文の書き方や査読の通し方がわからない」というものがアンケートに多かったので、これらの声に対応する企画を立案する、ということを決めた。

活動に際しては、今期は「教育研究者の仕事を考える」を通年のテーマとして設定した上で、前期の体制が好評だったため、今期も2チームに分かれて各チームで企画案を練ることになった。

(佐久間亜紀・慶應義塾大学)

2. リレー企画第一弾「学術論文執筆と投稿～その悩みにお答えします～」同時開催「『教育学研究』査読体制変革と投稿時の注意点に関する説明会」の報告

(1) 企画の趣旨

昨年度に引き続き、本委員会ではアーリーキャリアの方を中心に、研究者としてどのようにキャ

リアを積み上げていけばいいのか、またどのような研究者になろうとするのかを一緒に考えていく企画を行うことになった。今年度第一弾となる本企画では、学術論文執筆・投稿を支援するための機会として、査読経験者による学術論文執筆・投稿のお悩み座談会を開催した。なぜならば、研究者にとって論文執筆や出版は、学問および社会に対して極めて重要な活動だと考えられており、とりわけアーリーキャリアの研究者にとっては、査読を伴う学術誌に論文を掲載することが研究者として生きていくための登竜門の一つとして機能していると考えられるからである。

さらに、本学会の学会誌『教育学研究』の「論文審査要領」と「投稿要領」についての理解を深めるために、本学会編集委員会による説明会も同時に開催することにした。

この二つの部会を通して、教育研究者の重要な仕事の一つである論文執筆・投稿にアーリーキャリアの方々が積極的にチャレンジできるようになることが本企画の目的である。

(三時眞貴子・広島大学)

(2) 第一部：『教育学研究』査読体制改革と投稿時の注意点に関する説明会

本企画の第一部では、日本教育学会の機関誌『教育学研究』編集委員会の協力のもと、2024年12月末に新たに制定された『教育学研究』の「論文審査要領」と、改正された「投稿要領」についての理解を深めるための説明会を開催した。参加申し込み者から事前にいただいた質問に、機関紙編集委員会から回答していただくかたちで進化した。機関誌編集委員会からは編集委員長の本田由紀氏(東京大学)、副委員長の辻智子氏(北海道大学)、佐藤隆之氏(早稲田大学)、委員の伊藤実歩子氏(立教大学)、岩下誠氏(青山学院大学)、寺町晋哉氏(宮崎公立大学)、松田洋介氏(大東文化大学)にご登壇いただいた。

今回、参加申し込み者からは次のような質問が寄せられた。「今回の改革の最大の変更点は何か」「審査基準はどうなっているか」「教育学ではない

近接領域の論文に対して十分な査読体制が準備されているか」「採択・再審査・不採択となる論文の決定的な違いは何か」「どのような内容の論文を受け付けているのか」「実際に掲載されているのはどのような論文なのか」「他の教育学関連の雑誌への投稿と比べて意識しなければならないポイントはありますか」「以前は、投稿後に2回以上の再査読のチャンスがあったため、最初のハードルは低かったような気がしているが、この度の改正で再査読が1回になったことは、ハードルが上がったことを意味するのか」（一部表現を修正して掲載）。

これらの質問に対して、機関紙編集委員会から、これまでの投稿論文や掲載論文の学問分野の傾向性、不採択論文へのコメントのコーディングなど数量的な分析も踏まえながら回答していただいた。

また、機関誌編集委員会への要望に近いものとして「投稿要領と学会 HP の仕様が対応しきれていない。また、謝辞をどのタイミングで記載すればよいかわからない」「依頼されて執筆した特集論文はその旨を明記してほしい」「研究不正行為者やハラスメント懲戒対象者は編集委員会に入らないなど、安心・信頼して投稿するために査読者側の倫理規定についても策定してほしい」といった意見も寄せられ、こうした要望に対する今後の対応の方向性についても示された。

事後アンケートでは、「査読コメントのコーディングや採択論文の研究分野に関するデータ等を提示してもらえてありがたかった。特に、査読結果のコメントの傾向について、これまでは各々の体験談を通して水面下で共有されることが多かったので、公開してもらえたことで、研究を進展させるためのポイントをつかめた」「『教育学研究』のみならず、他誌に投稿する際にも役立つアドバイスだった。就職してしまうと、指導教員からアドバイスをもらえないので、このような機会はありがたい」といった肯定的な感想が数多く寄せられた。ただ、全体的に進行速度が速くなってしまったために「他誌との違いや再査読と不採択の違いなど、もう少しじっくりと聞きたかった」「メモが間に合わなかった」といった意見も寄せられた。その点については、反省点として今後の企画へと活かすことができればと思う。

研究成果をまとめて文章化し、世に問う作業は、研究者にとって必要不可欠な活動である。とりわけ、アーリーキャリアの研究者にとって査読を伴

う学会誌に論文を掲載することは、博士論文の執筆のための要件を満たしたり、就職活動においてアピールポイントとして強調したりすることと結びついており、自身のキャリア形成とのかかわりの中でも重要な意味を持つだろう。本企画が『教育学研究』はもちろん、その他の教育学関連の学会誌への投稿を促進するとともに、掲載に結びつく一助となれば幸いである。

（杉原薫・鹿児島大学）

（3）第二部：査読経験者による学術論文執筆・投稿のお悩み座談会

第二部では、学術論文執筆および投稿に関する疑問や悩みなどに、査読経験者である本委員会委員長の佐久間亜紀氏（慶應義塾大学）と副委員長の三時眞貴子氏（広島大学）の2名が登壇して座談会形式で答えていく企画を行った。質問は事前に参加申し込み者から募集し、さらに当日もリアルタイムで参加者からの質問を受け付けた。事前に寄せられた質問を整理すると、①論文の書き方、②査読でみられていること、③査読結果との向き合い方、④論文の投稿先の選び方の4つに大別することができ、当日もこの順に進行した。

①論文の書き方

主に初めて学術論文を執筆する院生を念頭に、論文執筆に関して、課題設定、分析、研究結果など、どこから書くのがよいか、また挙げるべき先行研究の量はどのくらいかという質問を取り上げた。これに対しては、具体的な疑問文を考えて問いを絞ること、読んだ先行研究すべての記載は必要ないが、それでも相当量の渉猟が必要であることが述べられた。そして、自分が本当に知りたいこと・調べたいことについて書こうとする姿勢が一番大切であり、自分が何のために論文を書くのかということと向き合い続けることの重要性が強調された。

②査読でみられていること

投稿に関わって、査読を通過する論文／しない論文の違いと、論文の書きぶりによる査読者への心象の2つを話題とした。前者については、課題設定、方法論、結論が一貫しているかどうか、重要な点の一つになると述べられた。この点について参加者からは、とはいえ「自分ではなかなか自覚することが難しい……どのようなことを心がけると良いか」と質問がなされ、ゼミや学会で生

産的なコメントをする訓練を積み重ねることが論理の一貫性に敏感になることに繋がると返答がなされた。

後者については、学会ごとに査読体制の違いはあるが、査読者自身のイデオロギーや主張や価値判断を査読に持ち込まないことは、基本的にはレビューで共有されていると述べられた。とはいえ、読み手を意識して、専門ではない査読者に審査されても論文の重要性が理解される書き方や、論拠に基づいた説得的な展開は当然のこととして求められているとのことであった。

③査読結果との向き合い方

査読結果では、査読者から論旨に関わる重要な指摘やより良い論文にするための助言など、様々なコメントを受ける。そうしたコメントを投稿者としてどう受けとめるかに戸惑いや迷いが生じることがある、という悩みが寄せられた。

両氏は、査読は複数の査読者で議論されるので、基本的には的外れな査読結果にはならないはずだとした上で、どうしても納得できないときは自分だけで判断せず、指導教員や信頼できる研究者に相談して解決を目指すのがよいとした。それに続けて、査読コメントにおいて投稿者が構想した課題設定とは異なる論点からの提案がなされた場合には、論文掲載を目指すのであれば指摘通りに修正することが近道ではあるものの、納得できない場合は、もともと投稿者自身の課題設定や論文構成も含めて、信頼できる研究者と共に再検討するのがよいのではないかと意見が出された。

④論文の投稿先の選び方

「どこに投稿していいかわからない」という質問に対して、教育史などの基礎学問を親学問としている領域では自分のフィールドをいくつか持つことで絞られていき、教育方法学などのマルチ・ディシプリンの立場では論文ごとの投稿先を、指導教員や信頼できる研究者と相談しながら決定することが重要になると、登壇者それぞれの専門分野も反映された応答がなされた。

以上を踏まえて、質の高い学術論文を執筆するために他者の論文の重要な点を読み取り、よりよい論文となるよう分析して生産的な応答ができるようになってほしい、と登壇者たちの願いが述べられた。最後に参加者から「研究をして論文を書いて投稿をして掲載されるということ」の原動力について問われると、教育という事象において否

応なく生起する問題を研究によって探究し明らかにするという信念と、先人たちが築いてきた学問の世界に一研究者として僅かながらも新たな風を吹き入れんとする熱意が語られた。

事後アンケートでは、『「なぜ研究をするのか？」という問いを大切にしたい」という感想をもちました』や「自分が紀要などで査読を始めていることもあり、査読の際に大切にしていることなども理解でき、大変良かった」といった意見があった。本企画が論文執筆・投稿への励ましとなるだけでなく、査読者の立場でも受けとめられ、幅広い参加者層に資する内容となっていたことがうかがえた。一方で、「院生が、指導教員に恵まれず、まともな指導を受けられない状態にいる……[という]話題は、なんとなく学会の議題としてはタブーにされているように感じます。結果として、今回の座談会もそうですが、本当には困っていない人の間にのみ通用する言説空間が形成されてしまい、その点が心苦しく感じました」という意見も見られ、駆け込み寺的に参加した者の思いに沿いきれなかった面もあった。

(大矢龍弥・豊橋創造大学短期大学部)

(4) 総括

二つの企画の事後アンケートからは、論文執筆・投稿に関する情報共有への需要の高さがうかがえた。その意味で、本企画を実施できたことは大きな意義があったと思われる。特に若手育成委員会の企画に、編集委員会の委員長・副委員長を含む7名の委員が、多忙な中、時間を割いて資料を準備し、協力してくださったことに心からお礼を申し上げたい。また第二部では、論文執筆・投稿に悩む院生を含めたアーリーキャリアの研究者だけではなく、これから査読者になる若手・中堅研究者からも反響があり、学会全体として教育研究者の在り方を皆で考えていくことの重要性を感じた。論文執筆や投稿、査読について語り合う座談会の最後に、「なぜ研究を続けているのか」という本質的な問いが出たことは、結局はこのテーマが研究者はなぜ存在するのかという我々の存在意義の問題に繋がっていることを示唆している。二人の応答は、それぞれの研究領域の性格や研究者としての在り方の違いを明示するものになったが、それこそが多様な専門領域の集合体である教育学の柔軟性と包容力の証左となったと言えるかもしれ

れない。

最後に、座談会で上手く伝えきれたか不安もあるため、私が研究を続けている理由について改めて簡単に述べておきたい。それは名もなき人々が生きることめぐる経験した喜びや悲しみ、苦しみ、葛藤、妥協、その中から見出した希望や戦略などさまざまな感情や選択、生きた軌跡を可視化したいという思いからである。とはいっても、論文が掲載されたからといって「彼らを可視化できた」という手ごたえを感じるわけではない。そこまではいかなくとも「彼らの経験を今の総体の中に落とし込むことができた」というささやかな満足感によって私の研究意欲は支えられている。今回の座談会を通じて、「どのような研究者になりたいかは自分が決める」ことの重要性和意味を示すことができたら幸いである。

(三時眞貴子・広島大学)

3. リレー企画第二弾「教育研究者の多様な仕事と醍醐味」

(1) 企画の趣旨

本企画は、これまでの本委員会の企画したイベントにて寄せられた意見や、委員会での複数回の議論を経て計画された。そこで本企画では、教育研究者の仕事や醍醐味の多様性に注目することになった。この注目は、教育研究者という言葉を広い意味で捉えることで、そのキャリアの可能性を幅広く認識し、それぞれのキャリアから学び合えることができるのではないかと問題意識に基づいたものであった。そうした理解が、教育研究者の幅広い連帯を準備することに繋がることも期待した。本企画では、多様な仕事に就く教育研究者による話題提供(全体会)と、話題提供者も交えた少人数での議論や交流(グループセッション)の場を設けた。

(2) 登壇者の報告概要

上記の企画趣旨に基づき、以下の3名の登壇者の協力を得て話題提供(全体会)の企画を実施した。第一に、仙台市総務局人材育成部人事課の主事を務める、豊田貴紀氏である。豊田氏からは、海外調査なども含んだ主に修士課程までの教育研究の経験を基盤とし、学校の教員としてのキャリアや、その後の別の大都市での一般行政職としてのキャリアなどについて、その仕事と醍醐味につ

いて報告がなされた。第二に、お茶の水女子大学附属高等学校の教諭を務める、飯島裕希氏である。飯島氏からは、授業研究や海外のカリキュラム研究なども含んだ主に修士課程までの教育研究の経験を基盤に、学校の教師としてのキャリアの蓄積について、その仕事と醍醐味について報告された。そして第三に、国際機関での教育コンサルタントを務める、野呂(中島)朋子氏である。野呂(中島)氏からは、国際教育開発に関する主に修士課程までの教育研究の経験を基盤とし、様々な国際機関における教育コンサルタントとしての、その仕事の醍醐味について報告があった。こうした三者の多様なキャリアについて一つのイベントにおいて見聞する機会は貴重なものとなった。

(3) 指定討論と質疑応答

指定討論は、本委員会の佐久間亜紀委員が担った。まず、佐久間委員からは、教育研究者としての大学教員のキャリアの多様性について説明された。佐久間委員は、国立大学と私立大学、教員養成系大学や総合大学や研究大学、教育学部や教育学研究科や教職大学院や教職課程や全学の教育研究センター、地方と東京といった諸観点から、大学教員のキャリアがその実きわめて多様であることが示された。中でもジェンダーをめぐる数々の困難は、本委員会の仕事としても、本学会の仕事としても、その克服が喫緊の課題であることが改めて明確にされた。

さらには、上記三名に対して、それぞれのキャリアの多様性を尊重した上で、それぞれのキャリアにとって励ましとなったこととそうでないことについての質問がなされた。三者からの応答の焦点として、キャリアの創造において、自己の内側の声とキャリアの歩みが軌を一にする契機が鍵を握ることが示唆された。

その後のグループセッションでは、登壇者を中心に小規模のグループを形成し、各々のグループの中で交流や議論を積み重ねていった。特に、グループセッションでは参加者からも切実な問いが出され、真剣な交流や議論が続いていった。

(鈴木悠太・東京科学大学)

(4) 総括

本企画においては教育研究者の多様性に着目し、実際、三名の話題提供者の仕事の経験やその醍醐

味も多様であった。以下では、多様である中に共有していると思われる志向について、また、大学院での学びや教育研究者としての専門性とその後のキャリアの関連について整理することで総括とする。

まず、多様性の中で三者に共有していると思われるのは、国内外問わず子どもたちと教育について、また、自分に何ができるか／何がしたいかという自己の声に真摯に向き合う姿勢であった。例えば、豊田氏は、「頭でっかち」にならないように、目の前の子どもと向き合うことを教員時代に大事にしていた。そして、研究主任として同僚の先生方と取り組む中で、周囲の先生方と自らの価値観の違いに気づき、また、自らの関心の変容に正直に向き合い、行政職への転職を決意したという。飯島氏は、生徒からの感謝や授業の面白さを伝えてくれる生徒たちがいる一方で、“I hate you.”と生徒から言われた経験をお話された。しかし、その生徒の姉から「先生が嫌わないでいてくれるから、妹は嫌いでいられる」という言葉を受け、教師として生徒との多様な向き合い方を経験したという。また当初法学部出身であることが、教育に携わる自分の足かせとなったという。そのことを最も気にしていたのは自分であり、自らをディスカレッジする自らの声と向き合いながら、同僚や学生時代の同期との関係の中で乗り越えていったという。また、野呂（中島）氏は、常に世界を視野に子どもたちを想起しながら仕事に取り組むという。そして、学生時代に就職について悩みぬいたうえで、自らが最もしたかった仕事に就いた。安定性はなくとも自分の専門性や仕事が子どもたちのためになることに喜びを得るといふ。このように、三者三様の子ども・教育とのかかわり方やこれまでの歩みがありながら、子どもたちや教育、そして自らの内なる声に真摯に向き合いながら、行動してこられたことが今に繋がっていた。このことは、アーリーキャリアの研究者にとって、何のために研究をするのかを問い、また、忙しい毎日の中で見過しがちな自らの声に耳を傾けることの重要性を再認識することに繋がると考える。

次に、三名のお話から重要であると思われるのは、大学院での学び、あるいは教育研究者としての専門性が仕事にいかんにかに生きているかという点である。豊田氏は、教師時代に研究主任として大学院時代の研究を実践の場で取り組むことに挑戦し

た。また、大学院時代に培った探究するという姿勢や、その持久力が現在の行政職で活かされているという。飯島氏は、大学に所属する教育研究者との共同研究の機会を創っている。それは、豊田氏もそうであったように「研究者としての教師」としての姿であり、研究をするということを教育現場において継続している。さらに、野呂（中島）氏は、自らの専門性を活かしながら、国際的な仕事に取り組むという点に仕事の醍醐味を感じるという。それは、これまでの学びの蓄積が、ある国の教育や子どもたちのために用いられることである。このように、大学院での学びとその後の仕事との関連を探ることは、先を見通すことが困難なアーリーキャリアの研究者にとって、現在の学びや研究を1つずつ積み重ねていくことが、まだ明確には見えない未来に繋がっていることを伝えていられるように思われる。

現在キャリアを考えている、あるいはこれから考えるアーリーキャリアの選択の幅に少しでも広がりが生まれ、また、多様な教育研究者の仕事があるという認識とともに、連帯の可能性を探る機会となっていたら幸いである。

（影山奈々美・東京大学大学院院生）

（5）本企画の成果と課題

本企画では「教育研究者」を広い意味から捉え、教育学の素養を活かし多様なキャリアで活躍されている三名に話題提供していただいた。その上で、大学教員というキャリアを一貫して継続しつつも、その中で多様な役割期待を経験されてきた佐久間委員長に指定討論を担っていただいた。ここでは本企画終了後に実施したアンケートの結果を基に、その成果と課題を整理したい。

本企画の参加者は、対面・オンライン合わせて90名（対面参加者41名＋オンライン参加者40名＋登壇者・委員9名）であり、アンケート回答者は13名だった。大会最終日の夕方に開催された企画のためアンケート回答率は低調だったものの、その内容は充実していた。

アンケート回答者の所属は、①大学等高等教育機関教員・研究員46.2%、②大学院生（博士後期課程）30.8%、③大学院生（修士課程／博士前期課程）15.4%、④大学非常勤講師7.7%だった。なお、①の回答者のうち、初職に就いて5年以内が50%、初職に就いて11～15年が33.3%、初職に就

いて6～10年が16.7%であった。②の回答者については、現在の職がテニユアの方が66.7%、任期付き（更新あり）の方が16.7%、任期付き（更新なし）の方が16.7%だった。この結果から、運営側の想定通り、比較的アーリーキャリア期にあたる方々にご参加いただいたと分かる。

アンケート回答者の専門分野について自由記述方式で尋ねたところ、教育学／教育史・哲学／教育方法学／教育社会学／教育行政学／教育経営学／日本語教育・教師教育／社会教育・生涯学習／多文化教育・先住民族教育／応用言語学／教員養成・部活動・教員の働き方・学校の統廃合等、多様な専攻・研究関心の方々にご参加いただいたと確認できた。ここに、本学会ならではの学問分野の多様性を見て取れる。

本企画に関するアンケート結果は、次の通りである。すなわち、「第1部全体会」にあたる登壇者の話題提供の満足度は、「満足」84.6%、「やや満足」が15.4%であった。「第2部グループセッション」にあたるグループごとの議論・交流の満足度は、「参加していない」が53.8%、「満足」が23.1%、「やや満足」が15.4%、「やや不満」が7.7%だった。この結果から、第一に第1部（話題提供）の満足度の肯定的回答が100%である点、第二にアンケート回答者の約半数がオンライン参加である点、第三に第2部（グループセッション）の満足度も高かったものの、不満を抱えている回答者もいたと把握できる。

アンケートの自由記述欄には、次の意見がみられた。肯定的回答からみれば、「興味深い内容でした」「オンライン参加なので、2部には参加できませんが、またこのような機会を作っていただけましたら嬉しいです」「大変素晴らしい企画をありがとうございました」等のご意見をいただいた。他方、課題としては、「もう少しグループセッションをする時間があればよかった」「参加者の自己紹介もできずに終了の時間がきてしまった」「若手研究者の方々の話を聞くことにより、研究への意欲が高まる。また、話題提供者もいろいろな仕事をしており様々な示唆があった。現在、研究していること、あるいは研究の方向性が聞けたらよかった」等のご意見をいただいた。

以上のアンケート結果から本企画を総括すれば、本企画の趣旨・中身自体には多くの参加者から賛同を得られ、満足度も高いものとなった一方、特

にグループセッションの時間が不足しており、参加者間の意見交流の時間を十分確保できなかった点に課題が残った。開催時間については、委員長のご尽力により例年と比べて長時間確保し、参加者一人ひとりが発言できるようグループを複数設ける等の工夫を講じたものの、グループ分けについては参加者が各自選択する方式を採ったため、グループ毎に人数に偏りが生じ、十分発言できない参加者が出てしまった。アーリーキャリア期の会員にとって参加者間で対話できる機会は貴重であり、多様な学問分野の会員が所属する本学会だからこそ大切にしたい時間・空間でもある。また、今回は過年度のアンケート結果から「多様なキャリア」に焦点化して本企画を開催し、好評を得られた一方、グループセッションの様子やアンケート結果からは研究面での意見交流についてもニーズがあると把握できた。今後は、参加者同士で対話する時間を十分確保するよう運営方法を再検討するとともに、本学会ならではの企画についても引き続き練っていききたい。

最後に、本企画の運営にあたって、日本教育学会事務局山口はるか様および濱本潤毅様（東京大学大学院・院生）にも貴重なお力添えを賜った。当日スムーズに本企画を進め、無事終えることができたのは、お二人のご尽力があったからに他ならない。伏してお礼申し上げる。

（西野倫世・滋賀大学）

4. おわりに

今期も、縁あって集まった委員七名で、年齢や性別、専門領域の壁を越えて、力をあわせて委員会の仕事を進めることができた。私たちの企画を通して、アーリーキャリアの皆さんに少しでも資することができていれば、これほど嬉しいことはない。

近年では、院生も博士論文提出までの締め切り追われつつ厳しい生活を余儀なくされているし、大学教員も本務の仕事が激増している。本学会の運営は、こうした多忙な生活の中にあって、すべての委員たちの献身的な努力によって支えられている。委員諸氏の貢献について、この場を借りてあらためて感謝したい。今回の経験が、各委員の人生に対しても、何らかの恩恵になることを願っている。

（佐久間亜紀・慶應義塾大学）